第三回星新一賞応募作品

私の仕事は

みかん愛

　私の仕事は工場のラインに入り、決められたルーチンをこなすこと。
　毎朝同じ時間に起き、同じ電車で仕事場に向かい、同じ作業をして、同じ時間に帰るだけの毎日。最近は景気も悪く、出勤しても手持ち無沙汰である。
　真新しいことなど何もなく、面白いと思うことも悲しいと思うことも、最近はない。まるでロボットのようだ。いや、いっそロボットになってしまいたいと思う。

　私の横に、いつもの男が立った。最近入ってきたＫだ。
「よう。昨日のテレビでやっていた話、聞いたかい？」
「どんな話だ？」
「安くてかしこい新型の人型ロボットが開発されて、工場とかに導入しやすくなって、人間の仕事が減るって話さ」
　人型ロボットは、まだまだコストが高く、すぐには量産されないだろうと言われていた。Ｋの話に、私はショックを受けた。

　Ｋが言った。
「この工場にも、すぐに新型ロボットがはいってくるかもしれないな」
「冗談でもやめてくれ、仕事がなくなってしまう」
「ここを離れたら、行くアテはあるのかい？」
「ないな。ろくに学校も入ってないし、資格があるわけではない」
「ははっ、そりゃそうだ。ロボットが学校に行くわけないもんな。やっぱ、お前のような旧式のロボットは、使っていればコストもかかるし、思考にバグも出てくるし、それにお前、自分のことを人間だと思っているポンコツだもんな」

　私の仕事は、おしゃれなバーで歌うこと。
　パーカッションのリズムに合わせ、ピアノのメロディに乗り、透き通る声で歌う。
　今日歌うのは、静かなバラード。シックなドレスを着てステージに立つ。
　私がステージに立つ日は、あまり人が来てくれない。それが少しつまらなくて、歌声もつい寂しくなってしまう。

　今日は珍しくお店が貸し切りで、団体客の前で歌を歌う。一曲歌うと、きれいな身なりの女性が話しかけてきた。
「心が揺さぶられるような、素敵な歌ね。そして、私が聞いた歌声の中で、あなたが一番上手だわ。できればもう一曲歌ってくれないかしら」
「ええ、喜んで。精一杯歌わせてもらうわ」
「ありがとう、期待してるわ」
　こんなことを言われたのは初めてだ。初めて、ここで歌を歌っていて良かったと思えた。

一曲歌い終えると、わっ、と拍手が起きた。私は、先ほどの女性に声をかけた。
「どうだったかしら、気に入ってくれたかしら」
「とってもきれいな曲。でも、普通の人が歌うのは難しそうね」
「ええ、私も上手に歌えるようになるまでたくさん練習したわ」
「そう、人間って大変ね。さっきあなたの歌を解析したから、これで私たちはいつでも音声合成して歌えるわ」

私の仕事は工場のラインに入り、決められたルーチンをこなすこと。
定められた手順の仕事を延々と繰り返し、定時ぴったりに仕事をやめ、倉庫に戻って横たわり、思考ソフトを停止する。最近は景気がいいのか、単調な作業量とその多さに気が滅入ってしまう。
しかし、どんなに気が滅入ってもプログラムのとおりに働き続ける。ロボットとはそういうものだ。

私の横に、いつものロボット３号が立った。ロボット３号は、音声合成ソフト特有の声で話しかけてきた。ロボット３号との会話は、滅入った気が紛れる唯一の気分転換だ。
「調子はどうだ？」
「ロボットに調子も何もないだろう。それに、勤務時間中の対話プロセスの実行は禁止だ」
「相変わらずの堅物だな、お前は」
開発者の遊びなのか、思考ソフトには、人間でいう性格のようなばらつきがある。ロボット３号は馴れ馴れしい性格だ。もちろん、決められたルーチンはちゃんとこなすのだが。

ロボット３号が言った。
「なあ、人間ってさ。与えられた役割に適応するようにできているらしいぞ」
「なんだよ、藪から棒に」
「普通の人間を看守役と囚人役に分けて一緒に生活させると、どんどん与えられた役割に従うようになって、それらしい行動をとるんだとよ」
「実にバカだな。人間っていうやつは」
「なら、お前はどうなんだ。ロボットと一緒に働いて、まるで本当に、仕事しかしないロボットみたいじゃないか」

私の仕事は、銃を持ち、テロリストと戦うこと。
エネルギーが切れるまで戦い続け、補給されたらまた銃を持って前線に出る。
外はひどく雨が降っており、今日は一日蒸し暑そうだ。
天気がどうであれ、私は、与えられた仕事をこなすだけ。ロボットとはそういうものだ。

空冷の効きが悪く、熱暴走で電源が落ちてしまいそう。まわりの奴らはよく平気なものだ、などと考えながら戦っていると、同じ顔をした三体が、私を取り囲んだ。この三体はきっと同じ型なのだろう。その中の一体が、私に話かけてきた。
「よう、今日もいっぱい殺したか」

「いちいち数えちゃいない。第一、敵だってロボットばっかりだ」
「まったく面白みのない奴だな、お前は」
　開発者の遊びなのか、思考ソフトには、人間でいう性格のようなばらつきがある。こいつは馴れ馴れしい性格のようだ。もちろん、戦闘はちゃんとこなすのだろうが。

　テロリストたちは頑強な抵抗を続けており、なかなか戦線が動かない。私のエネルギーももうすぐ切れそうだ。
　今度は別の一体が話しかけてきた。
「くそ、テロリストどもが、面倒なことこの上ない」
「ああ、まったくだ」
「いい加減じれったいな。よし、戦況を変えるぞ。お前、オトリになって突撃しろ」
「おいおい、どうして俺だけなんだ」
「俺たち三つ子が揃いも揃って突撃して死んでみろ、国のメディアから政府へ非難轟々だ。だが、お前の場合なら、死んで悲しむやつは誰もいないからな」

© 名古屋大学大学院工学研究科佐藤・松崎研究室